

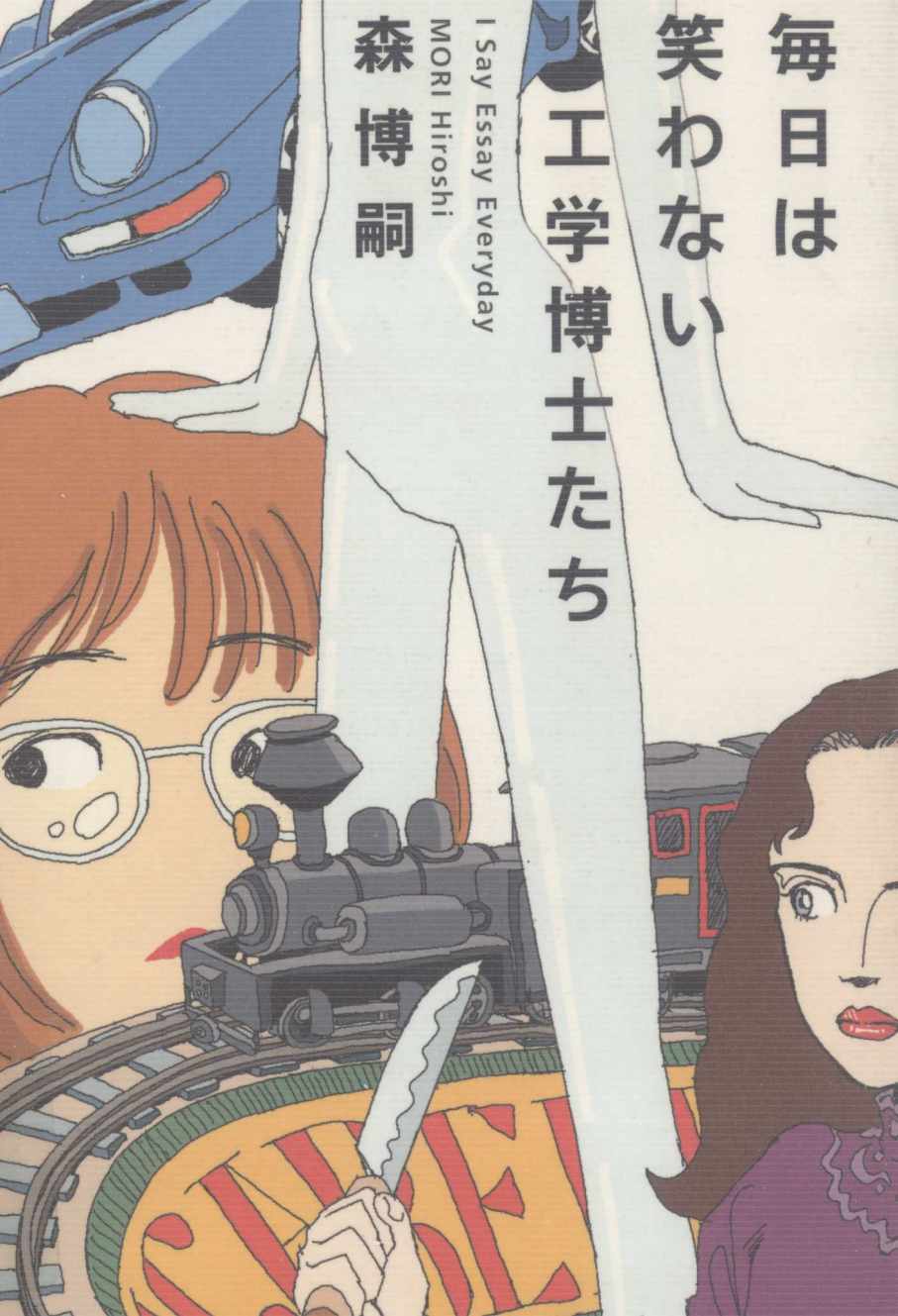
毎日
は
笑
わ
な
い

工学博士たち

I Say Essay Everyday

MORI Hiroshi

森
博
嗣



毎日
は
笑
わ
な
い

工
学
博
士
た
ち

I Say Essay Everyday
MORI Hiroshi
森
博
嗣

工业学院图书馆
藏书章



もり ひろし

森 博嗣

1957年、愛知県生まれ。某国立大学工学部助教授にしてミステリイ作家。

1996年、『すべてがFになる』（第1回メフィスト賞受賞）でデビュー。

同作に始まる〈犀川・萌絵シリーズ〉全10作は

ミステリイマニア以外にも広範な支持を得て、一躍人気作家となる。

ホームページアドレス <http://www03.u-page.so-net.ne.jp/ya2/cita/>

毎日笑わない工学博士たち

I Say Essay Everyday

2000年8月10日 第1刷発行

著者…………… 森 博嗣

発行者…………… 見城 徹

発行所…………… 株式会社 幻冬舎

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-9-7

電話 03 (5411) 6211 (編集) 03 (5411) 6222 (営業)

振替 00120-8-767643

印刷・製本所 …… 株式会社 光邦

検印廃止

¥1600

万一、落丁乱丁のある場合は送料当社負担でお取替致します。小社宛にお送り下さい。

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、

法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。定価はカバーに表示しております。

©HIROSHI MORI, GENTOSHA 2000

ISBN4-344-00013-7 C0095 Printed in Japan

幻冬舎ホームページアドレス <http://www.gentosha.co.jp/>

毎日笑わない工学博士たち

さて、10

大好きな11

もう12

1

2

3

曖昧な4

5

6

生意気な7

8

組立式9

10

とても11

12

目次

月は何をしていたのか²⁵

月になった、と思っていたら³¹

月³⁹

月だ⁵³

月なの?⁶⁹

月……97って素数だ⁸⁵

月は忙しい¹⁰¹

月といえば、うさぎ¹¹⁵

月¹²⁹

月かもしれない¹⁵¹

月に透明な空¹⁷⁵

月¹⁹⁵

月こそさりげなく²¹⁷

月²³⁹

月の斜面²⁶³

月には見えない²⁸⁹

月は真面目に行こう³¹⁷

1. さて、幸か不幸か第2弾

この本を手にした皆さんのほとんどはご承知のことと想像するが、今年の2月に『すべてがEになる』という怪しいタイトルの本が出版された。それは、森博嗣（何を隠そう、僕のことだ）というマイナなミステリイ作家（と自分で名乗っているのではない、これは呼称である）がインターネットのホームページ（HP）に毎日書き綴った（はっきりいって非常にいい加減な内容の）文章をそっくりそのまま本にして出版したものだった。『モーニング』で大人気の漫画家・山下和美氏の柳沢教授が登場していたし、これまた人気絶頂の鈴木成一氏の凝ったブックデザインのためか、その本は予想外に売れた。飛ぶ鳥を落とす勢いの幻冬舎でも予想外だったという（もう少し正確に記せば、そもそも期待されていなかったわけで、これは実に幸이었다）。

ただし、森の担当の志儀氏は、どうやらもう少し多く売れると踏んでいたようだったし（夢多き人なのだ）、森としては最初から予想し、志儀氏にも予告したとおりの数字だった。つまり、人それぞれ好き勝手に未来を希望的に観測するだけのことで、どれだけ望んでも自由だし、夢を抱くことはそれ自体楽しい。その行為が結果の数字をあまり増減させないだけのことである。

とにかく、小説に比べたら本作り（編集）が非常に大変だった。10倍は労力がかかっただろう。そうした苦勞に対して見返りが少ないのではやりきれない。しかし、一応採算がとれる部数が出回ったことは事実のようで、これは本当に幸運だったといえる。素直に喜びたい。

そんなわけで、予定どおり第2弾が作られることになった。それが本書『毎日笑わない工学博士たち』である。

第2弾の「弾」というほどの勢いは既にある。それに、このさき、いつまで続くのかは相変わらず不明瞭だ。そう……、客観的に判断して、もう1回くらいは出るような気がする。しかし、こんな程度のもので、そうそう長く出版されるなんてことはありえないだろう。「考えただけでぞっとする」という表現によく出会うのだが、考えただけでぞっとした体験は森にはないので、この言葉を使う機会がまだない。

それにしても、小説よりもエッセイの方が読みやすいし、読んでためになる（確率が高い）、情報量も多い（ページ当たりであるが）、だから、当然エッセイの方が売れているのだろう、と森は長年信じていた。このほか、長編よりも短編集の方が（読むのが楽だから）売れるだろう、ノン・フィクションの方が（少なくとも情報としての普遍的な価値がある分）大衆にも受け入れられるだろう、などとも考えていた。今でも、森の周辺にいる人間の多くは、その傾向が極めて強い。現に、『すべてがEになる』で初めて森博嗣の本を読む気になった（人殺しの話など頼まれても読むものか）、という読者が（特に理系の）友人たちの間で散見される。そういう環境に森は普段いるのである。

だいたい、その類に属する人たちは、顔を少し斜めにして横目で蛍光灯を眩しそうに見ながら、こう言うのである（例外なくメガネをかけて

いるので、ガラスに光が反射している)。

「作りものの話なんか読んだって、時間の無駄だぜ」

明らかに脚色がある。今どき「だぜ」なんていう奴はいない。しかし、もっともなことだ、と思う。概して読書など時間の無駄だし、大方の人間は生きていること自体が時間の無駄だし、いっそ人間さえいなくなってしまうえば、無駄もなくなるし、そもそも無駄だと感じる存在もなくなるわけである。ときどき、すっきりしたいときがあって、そういうときには、せめて近く宇宙(銀河系くらいを想定)もすっきりしてほしいものだな、と溜息混じりに呟いたりもする。そんな哲学的な話は、きりがいいのでこのくらいにしておこう。

三重県にいたとき、同じアパートに住んでいたU田さんから、最近になって手紙が来た。彼女は、講談社ノベルスで森の本を全部読んでいるという。そのU田さん、書店のレジで女子学生ふうの若者が店員とこんな話をしているのを聞いたそうだ。

「あの、『すべてがEになる』って、ありませんか？ 森博嗣の」

「さあ、まだ、出てないみたいです」

U田さんは思った。

(あほやね〜、Eやない、Fだがね。『すべてがFになる』だよ。もう、馬鹿じゃないの、教えたろか)

彼女は、ノベルスのコーナへ走り、ノベルスを1冊手に取ってきて、こいつらに突きつけてやろうかしら……、と考えたわけだが、そこまでしゃしゃり出るのも余計なお世話だ、押しつけがましいオバさんだと思われるたくもないし、ただでさえ、最近、あちこちで鬱陶^{うっとう}しがられている、

そろそろ歳のせいか高い化粧品でもカバーが難しくなったし……、など
いろいろ考え合わせて、躊躇^{ちゅうちゅう}し、結局は行動しなかったそうだし（これも一部に脚色あり）。

あとで、事情がわかって冷や汗をかいた、とか。実際に、その程度では冷や汗はかかないし、森の場合、これまでの人生で冷や汗というものをかいた実体験は、地下鉄の階段で転んで腕の骨を折って、そのあと2kmほど歩いて自宅へ帰ったら、医者に行けと母に言われたので、また1kmほど独りで医者まで歩いていったときくらいである。

このように、『すべてがEになる』という姑息なタイトルは、同様のトラブルを全国で巻き起こしたらしい。これはオーバな表現である。本当は、三重県の他に、せいぜい2、3件くらいで、取るに足らない勘違いがあった、という程度だと推定される。

今回は、『冷たい密室と博士たち』と『笑わない数学者』のタイトルをもじって、『毎日笑わない工学博士たち』としたわけだが、明らかにこの書名は書店で尋ねにくいだろう。「あの……、毎日笑わない工学博士たち、ありますか？」という質問は、TVドラマの説明的台詞のようで舌を噛みそうだし、肺活量が少ない場合には息継ぎのタイミングがわりと難しい。呼吸の前後で思わず音が上がってしまうと、「あの、毎日笑わない？ ふう……、工学博士たち、ありますか？」となる。「何を言っているのか、こやつは」となるかもしれない。また、あかの他人に質問するような特殊な状況下において冷静でいられない人だと、きっと正確には発音できないだろうし、たとえ正しく言えたとしても、店員が聞き間違え、さらには、それを書き間違える可能性も高い。おそらく『笑う博士たち』くらいには短くなったりするだろう。『毎日笑わない工学博士たち』のように「は」が抜けるだけでも、実は意味が反対になってしまうのだ。しかし、最終的には本が買えると思うのでまったく心配していない。

2. 実はこっちが古いのだ

さて、改めて書くが、本書は、1996年にスタートした森博嗣のホームページ「浮遊工作室」の中の「ミステリィ制作部」内で公開されている「近況報告」のうち、1996年および1997年分を抜粋して印刷物にしたものである。さきに発行された『すべてがEになる』が同日記の1998年分であったので、今回の方が、過去に戻った古い内容ということになる。すなわち、順番が逆だ。どうしてこんなことになったのか？

最初は、とりあえず一番新しい新鮮な部分を本にしてみよう、と企画したのである。1998年が終わった頃に、話が持ち上がり、すぐにこれを出版する作業に取りかかった。ところが、これが予想外に難航し、発行に漕ぎ着けるまでに1年以上の時間がかかってしまった。

小説とか通常のエッセイならばテキストを所定のルーチンに流し込むだけで単行本になる。出版社もそれぞれの作業担当者も仕事に慣れている。それに比べて、とんでもなく手間がかかることが、途中で明らかとなった。とにかく面倒だったのだ。

一方では、インターネットで既に公開されている日記を印刷物にする試みは、前例もほとんどなく、どんな形態で書籍としての付加価値を持たせるのか、という悩みもあった（大袈裟に書けば、だが）。さらに、「どうせ小説ほどは売れんしな」という諦めの気持ちも15～25%くらい存在したので、どうしても本腰が入らない。なんとなく作業が片手間になってしまったものと推察される（正直に書けば、だが）。

しかしながら、でき上がった『すべてがEになる』を手にとっていただ

ければ（ここを読む人たちはきっとご覧になったものと勝手に仮定）、わかる人にはわかるものと思っている（集合論的に真である）。脚注の内容、レイアウト、そして本作りも随所に凝りに凝っている。これでは、時間がかかったのもしかたがない（ブラボー！）、と是非とも自己暗示をかけていただきたい（願望）。

この勢いをもって、すぐにも1996-1997バージョンを作る予定であったけれど、やはり、今回も数カ月遅れてしまった。この分でいくと、2000年中に第3弾（1999年分）が出せるのかどうか、クウガと刑事の関係くらい怪しい（誇張&局地的比喩）。ただ、読者の半分近くは、森のHPに直接アクセスして日記をリアルタイムで読んでいるようなので、ほとぼりが冷めた頃にまとめて読むのも一興かとも思う。「天才は忘れた頃にやっとかめ」という名古屋限定の諺もあるではないか（地域限定駄洒落）。何事もプラスに考えるのが、自分の健康のためである。

いずれにしても、今回は「速筆で知られる森博嗣が、構想と執筆にきっちり1年半をかけた超大作」である。まえの本より5割増だ。薄いけど……。

3. 当時を振り返って

どちらかというと、内容は1998年の方が面白いのではないかと森は思う。何故なら、この日記（近況報告だが）をいずれは印刷物として出版しよう、だから毎日エッセイのつもりで書こう、と思い始めたのが1997年の中頃であったと思うし、過去にあった事例と日頃着想した断片的な事柄を組み合わせ、単なる行動記録ではない普遍性を持たせ、可能ならば一般的な興味に繋がる記述をしようと心掛け、最初は難しかったものの、1998年頃になってようやく、模索しつつも少しは筆が乗ってき

たかな、と仕事の成果を自己評価していたからである（長い文章だ）。

日記は1996年の8月から始まった。最初は数日に1度というインターバルである。素朴な記録と無邪気な意見が、のどかで無防備な表現で書かれている。シャープさもないけれど、逆に親しみが感じられるかもしれない。それが本書の見どころの1つだ、ということにしておこう（笑）。

『すべてがFになる』が講談社ノベルスから出版されたのが、1996年の4月。続けて、『冷たい密室と博士たち』が3カ月後の7月に発行。そのあとの夏休みから、HPの日記が公開された。本書を読んでもらうとわかるように、ちょうど、『幻惑の死と使途』や『夏のレプリカ』を執筆している時期でもある。

自分で日記を読み返すようなことはないので、今回ゲラになったものをじっくり読んでみると、「ういういしい」文章があちこちに見つかって、微笑ましかった（自分でいうのもなんだが……）。ですます調で文章を書くことは減多にない。だが、このHPの近況報告だけは、当時のういういしさを引きずって、今でもですます調のままである。「初心を忘れるまでやれ」というのが森のモットーなので、そろそろ変革が必要だと感じているのだが。

趣味のHPである「浮遊工作室」を立ち上げる少しまえから、研究者としてのHPは開設していた（「A面」と呼ばれている）。研究室にある古いマッキントッシュがサーバだった（今もあまり変わらない）。つまり、プロバイダに加入しているわけではない。大学はパソコンさえあればインターネットに簡単に接続でき、電話代も気にせずに24時間接続できる環境にあるからだ。模型飛行機関係で「飛行機製作部」を、続けて、鉄道模型関係で「機関車製作部」を立ち上げ、第3事業部として、「ミステリー制作部」のサイトを作った。そして、そこで近況を書き始めたのであ

る。現在、森博嗣のウェブ・サイトといえば、「ミステリィ制作部」のトップページ（しかもミラー・サイト）が紹介されるので、そこがホームページだと思っている人も少なくない。アクセス・カウンタは既に180万人に達している。日記を見るためアクセスする人は1日のべで1万人近い（昔は1日に100人でびっくりしたものだ）。

さて、HP開設に数カ月遅れて、サーバを管理していた大学院生のN木君が、BBS（電子掲示板）を同サーバで稼動するようにしてくれた。ここで、大勢の読者からの書込みと、それに対する森のレスがしばらく続いた。このBBSの名称は、森ミステリィ・ユーザ・サポート・センタであり、略してMUSC（むすく）と呼ばれた。当時、このようなBBSはまだ少なかったし、そもそも、ミステリィ関係のサイトは、1日もあれば日本中のものをすべてチェックできてしまうほどしかなかったのだ。現在のように、大勢の人たちがHPを持ち、みんなが公開日記を書き、本の書評（あるいは感想）を発表し、そしてそれぞれ自分のBBSを管理している、という状況ではもちろんなかった。そんな時代だ、ということを念頭に（たまに思い出して）、本書を読んでもいただければ、と思う。なお、MUSCはサーバの容量オーバーのため閉鎖され、その後は、ファン倶楽部の森ばふえ（森ミステリィ・パーフェクト読者の会）のBBS（森ばふえ・すくらんぶる）など多数のBBSが後を引き継いでいる。

さて……、それにしても、本書を読み返してみると、当時の森はまだまだ本をよく読んでいることに驚く。当時は文庫も出ていなかったため、1年に4冊の新刊を講談社ノベルスから書下ろして3カ月おきに出していた。常に5、6冊さきまで作品のストックがあった。だから、1年以上さきの作品を余裕で書いていたように記憶している。したがって、本を読む時間もあったというわけだ。今では1カ月に1冊小説が読めれば良い方である（笑）。

小説を初めて書いたのは1995年の8月なので、つまり、今回の日記がスタートするちょうど1年まえになる。それまでの20年間は、毎年ほぼ50冊の本を密かに（誰に対して？）読んでいた。そのうち、30冊くらいがミステリイだったと思う。全部が海外の翻訳もので、例外なく文庫を読んでいた。自分でミステリイを書き始めてから、一番の変化は、国内作品を読むようになったことだろう。出版社からただで本が届くためだ。以前は、ハードカバーの本など見向きもしなかったし、ノベルスという新書サイズの小説など存在さえ知らなかった。だから、ノベルス作者よりもノベルス読者の初体験の方が遅かったのである（笑）。京極夏彦を知り、西澤保彦を知り、笠井潔を知っていく過程が本書には描かれている。

結局のところ、読み手から書き手への変化が、1996年から1997年の、この当時の日記の読みどころではないだろうか……。なあんて、古文の参考書にある解説みたいなことを書いてしまったことよ（感嘆）。気にしないでもらいたい。

4. 何が読み取れるだろう？

要約すると、言いたい放題のことが毎日ちびちびと書いてあるだけだ。本当かどうか疑わしいし、特に驚くべきこと、抱腹絶倒の面白さもない（もし、そういうものを思いついたら小説に使うために温存するだろう）。

ただ、基本的に、あまり人と同じことがしたくない性分、つまり天^{あま}の邪鬼^{じあく}なので、常識とは反対のことを（場合によっては多少誇張して）書く傾向にある。それには明解な理由があって、常識的なことを普通に書いても面白くないからだ。そういう発言はTVのコメンテータに任せておけば良い。

最初のうちは、インターネットにアクセスできる極少数のファンのために、小説のアフターサービスとしてHPの日記を書き始めたわけだが、前述のように、途中で「これ自身に読みものとしての価値を持たせられないか」と着想した。だから、毎日、ビジネスとして書くように努めた。一応プロであるので、一般の大多数の人が持つ健全な発想による常識的な発言を書くわけにいかない。事件があれば「嘆かわしい」、「犯人は何を考えているのか」などとは書けない。それでは、花火を見て「綺麗だ」と書くのと同じである。それがいけない、と言っているのではなく、それでは文章をお金と交換することができない、という意味だ。つまり、何か、人を驚かせるような内容、人が真似のできない内容、である必要がある。それが商品価値だと思う。自分の創作物をお金と交換するという行為（ビジネス）とは、そういうことなのだ。相手にとっても価値がなければ取引が成立しない。

当たり前のことを違う角度から見る。人とは違うところを指摘する。すっかり安心している了解事項を批判する。ただし、少しだけ注意したことといえば、何かを批判するときは、できる限り個人ではなく、一般論として書くように努力した。逆に、褒めるときには個人を褒めたい。それが森的には優しいアプローチだと思ったからに過ぎない。昨今、インターネットは、個人の日記や感想文で溢れ返っている。「カラオケのように、皆が歌って、そして誰も聴いていない」状況はかつて予想されたとおりだ。これはある意味でとても健全なことだと思う。ただ、その中であって、やはり、天の邪鬼性を発揮しつつ、少しでも多くの人に読まれるものを模索しているつもりではある。マイナメジャ性を追求している、と表現すればイメージが近いだろう。

もう一点、自著の宣伝は可能なかぎりしないことにしている。情報としては伝えるが、「面白いから読んで下さい」「買って下さい」と書いたことはおそらく一度もない。自分の作品を面白いと思っているのは創作

者として当然のことだ（もちろん、多くの場合、その欠点も誰よりも正確に把握していることだろう）。しかし、読み手にとって、それが面白いかどうかは、読んだ人間以外には誰にもわからない（読んだ本人でさえわからないことも多い）。1000円の本が、読者にとって1000円と交換するだけの価値があれば、それは、その読者にとっての幸せである。森の日常には、そういったことは直接には入り込まない。漠然としたニーズを想定して作られていることは事実であるが、家電品や実用品のように、性能の把握は難しい。それに、気に入らなければ他に代わりはいくらでもあるのだ。少なくとも、読者の声を聞いて、それに従って小説を書くことはまずないだろう、と森は考える。

ポリシーとまではいえないものの、こういった日頃の姿勢みたいなものを本書から汲み取っていただければ、非常に嬉しい。しかし、無理かもしれない（だから、ここで書いているのである）。

誤解を避けるため、言い訳めいたことを書くが、一応、自分としては誠意ある態度をとっているつもりだ。森の世代は、どうやら「格好をつけたがる」年代らしい。表立ってあまり口にしたくない。でも、陰でけっこう苦勞し、自分なりの誠意を示そうとする。

政治家は皆、「有権者の皆様方のおかげです」とアンプを使って繰り返し、手を振ってアピールする。手袋をして誰とでも握手をする。しかし、彼らにメールを出したら本人からリプライがもらえるだろうか？ 電話したら質問に答えてくれるだろうか？ 作家も「読者の皆さんのおかげです」と頭を下げる。サインを求められれば、いつでも喜んで応える。

森は「読者の皆様のおかげです」とは口にしない。街で突然サインを求められても断ることにしている。そんな漠然とした対象に向かって、何が「おかげ」なのか理解できないからだ。見ず知らずの人に何故サイ